

Title	フオン・ウイゼの社會學論(二)(獨逸最近の社會學論(四))
Author(s)	米田, 庄太郎
Citation	經濟論叢 (1924), 18(6): 1056-1074
Issue Date	1924-06-01
URL	https://doi.org/10.14989/128175
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷八十第

行發日一月六年三十正大

論叢

道德統計論概説……………法學博士 財部 靜治

租税の公平と利益團體の組織……………法學博士 神戸 正雄

フオン・ウイゼの社會學論……………文學博士 米田庄太郎

海運同盟に對する英吉利の態度……………法學士 小島昌太郎

時論

移植民獎勵問題と世の謬見……………法學博士 山本美越乃

說苑

スミスの學說に關して福田博士の教を乞ふ……………經濟學士 谷口 吉彦

マルクスの勞賃論……………經濟學士 森 耕二郎

雜錄

貨幣廢止論……………經濟學士 中西 仁三

パレト氏を憶ふ……………經濟學士 松岡 孝兒

農業生産の機械化と經營規模……………法學博士 河田 嗣郎

附錄

本誌第十八卷總目錄……………

フォン・ウイゼの社會學論 (二)

(獨逸最近の社會學論(四))

米田庄太郎

二 「社會學の基礎確立に就て」に於ける社會學論

さきに述べし如く、フォン・ウイゼ氏が千九百六年に公にせる「社會學の基礎確立に就て」(Zur Grundlegung der Gesellschaftslehre. Eine kritische Untersuchung von Herbert Spencers System der synthetischen Philosophie. 1906) は、少なくとも余の知る處では、同氏が公にせる最初の社會學上の著書である。されば前節に於て述べしが如き同氏の社會學論の發生を研究するには、先づ此の書に於ける社會學論から考察し始めねばならぬと思ふ。而して此の書第一章序論「社會學の基礎に關する批評的概観」(Kritische Übersicht über die Grundlagen der Gesellschaftslehre) 中、同氏の社會學論が始めて、稍々組織的に論述されて居る。夫れで此處に同章に就て、同氏の最初の社會學論を考察することとする。

今「社會學の基礎確立に就て」に於けるフォン・ウイゼ氏の社會學論に就て、余の先づ注意したのは、此處では同氏は近來盛に主張して居る社會學論、前節に於て述べしが如き特殊學としての形式的社會學論、つまりジムメル流の社會學論をまだ唱へて居ない事である。否な同氏は寧ろかゝる社會學の概念を承認して居ないのである。而して社會學の任務、或は特に研究を要する社會學の問題を論ずるに當つて、先づ夫れは一切の人間の關係の内容が、公式に於て結合される處の社會法則を發見することなく、吾人は生活を内部的に考察すればするほど、社會生活の發達及び狀態を分量的に測定せんとするは無意味となり、只表面的な現象のみが數的、統計的に把握されるだけであることを論じたる後、ジムメルの社會學概念を評して、左の如く述べて居る。

ジムメルの主張するが如き、社會の構造の純形式論 (Eine blosse Formellehre vom Bau der Gesellschaft) も亦、假令此の如くに社會學の概念を制限することは、方法論者に對しては誘惑的であるかも知れないが、併し余輩にありては、夫れが社會學の任務であるとは思はれない。是れかゝる純形式論は社會哲學的内容に於て深まることなくば、非經驗的構想の企だてに墮落する恐れがあるからである。ジムメル自身も決して生きた内容の把握を斷念して居ないのである。 S. 4.

然らば本書に於ては、フォン・ウイゼ氏は社會學の課題或は任務を如何なるものと考へ、隨ふ

て社會學の學的概念を如何に決定せんとして居るか。今同氏の論ずる處によれば、社會學的研究の課題或は任務は、個人と個人によりて構成されたる團體との關係、更に此等の團體相互と此等の團體によりて發展されたる文化體系との關係を究明することである。併し此の際に、右の課題を心理學的に深めることが肝要である。而して此等の問題が取扱はる可き見地は、一の人類學的倫理學的見地である。かくて中心問題は一層深い處に存在する問題に轉化する。夫れば即ち個人の運命が集團或は大衆の運命と、如何に織り合はされるか或は組み合はされるか (Wie verwebt sich das Einzel-mit dem Massenschicksal?) と云ふ問題である。吾人は法學や經濟學などが對象となすが如き、より多く表面に存する諸關係の敘述と相並んで、人間を相互に結合する、又人間を彼等の事業或は仕事と結合する、より複雑な、把握するにより困難な心理的紐帶を如何にして闡明し得るか。諸勢力の此の纏れを解き捌くことの如何に困難であるかは、ジムメルの著作の總ての讀者は熟知するであらう。隨ふて直ちに問題全體の解決を企だて、概念的に公式化されたる理論を、一の體系の頂上に据附ようとしなない様に心掛けることが肝要である。或場合に於て存する關係、例へば個人と其の家族との間や、教會と國家との間、或は學問と藝術との間に存する關係を分析し、其の歴史的發達を究明し、且つ其の際に出来るだけ現實を離れず、之れに即して行くことが出来たならば、余輩はかくの如くに研究を進めることによりて、かの未熟な概念の網の

中に何物でも捕へ込まんとする新體系を無益に積み重ねるよりは、學問及び生活に對して一層有益であると思ふ。

フォン・ウイゼ氏は以上述べし如くに、先づ社會學の課題或は任務、其の根本的見地及び當面の仕事を約述したる後、一方に於ては社會學と歴史及び國家學との關係、他方に於ては社會學と心理學及び人類學との關係を論究して、以て社會學の概念を更に明白に規定せんとして居る。

夫れ社會學及び歴史哲學の資料は、屢々同様なものであるが、しかも兩者は其の性質及び目標に於て異なつて居る。パールトが兩者を同一視せんとするは謬見である。歴史哲學の任務は事象の一切の範域に於ける共同的なるものを確定することにして、而して社會學の任務も亦同一であるを見るならば、社會學に於て常に個人の意義が大に後退するのみならず、尙ほ又歴史との混同により、其の過古のみを顧みる考察の結果として、現在の任務に於ける參加を過古に轉せしめのみならず、更に社會を経験的に把握せずして形而上學的に把握せんとする危険が大に増大するであらう。又コントが始めて力説せる如く、社會學は歴史的進行を合目的及び統一的として説明す可きものと見るも、矢張り謬見であると思はれる。此處にはかゝる歴史哲學或は社會學の考察が如何程成就されるかは、敢て論じなくとも宜からう。余輩は此處に歴史的規律性なるものが存し、世界史の階段構成なるものが存するや否やに就て、敢て判断を下さうとは思はない。併し若

し社會學は歴史的事象に於ける共同的なるものを證明す可き任務を有するならば、夫れは右の諸問題を肯定せねばならないであらう。而して其の場合には、社會學は主として最も一般的な抽象的概念を取扱はねばなくなるが、其の事は社會生活の詳細に於ける連鎖の複合を直視する力を、社會學から奪ひ去るであらう。余輩の見る處では、社會學に於ける思辨的要素は、其の記述的要素に對して後退す可きである。

次に社會學と國家學科との關係に就て考へるに、今や例へば經濟學の如き學問にありては、人間共同生活内に於ける一般的諸關係及び其等の關係の衝動力に、益々廣い領域を興へねばならなくなつて來た。併し夫れよりして第一に、經濟學に於ける特に國民經濟的なる部分が、一般的部分によりて押し縮められると云ふ弊が生じて居る。次に又多數の經濟學者は、物質的慾望充足の見地の下で、人間社會を考察する傾向を示して居る。然るにかゝる偏局的な見解に於ては、一切の動機中で饑餓の感を靜めることを目的とする動機及び之と近縁を有する衝動が、最も重要な視されてくるから、吾人はかゝる見解は望ましからぬものと考へる。人々が其等の動機及び衝動に於て、歴史的事象の特有な又殆んど唯一の源泉を認めれば認むる程、世界形象は愈々單純になるが、併し倫理的及び審美的に價值大にして甚だ精妙なる心理的要素(其の文化人類に對する意義或は重要を表示することが社會學の最も重大なる任務の一である可きである)が愈々大なる

暗黒を以て包まれてくる。余輩は決して總ての經濟學者に對して、彼等は只粗野な集團的本能のみを重要視すると云ふ非難を加へんとするのでない。しかも經濟學にありては經濟の動機を以て、實質的に正當であるより以上に社會的事實を説明せんとする危険の大なることは、否まれ得ないであらう。されば吾人は經濟學と社會學との間に、密接なる關係の存するに拘らず、兩者の完全なる混同を望んではならないであらう。

今社會學に對して其の最とも近い基礎となるものは、人間の學即ち人類學であるであらう。併し不幸にして吾人は尙ほまだ、非生理學的な、かくて歴史的な人類學を殆んど全く有しない。かゝる人類學は屢々要求された。併し人類學は尙ほ全く自然科學の占領する處となつて居る。而して人類學が精神科學として考察される場合には、夫れは殆んど全く土俗學の中に没入する。

されば社會學と更に一層複雑なる關係を有するは、心理學である。心理學は一部分自然科學に屬し、一部分精神科學に屬する。併し心理學は生理學と結合してかなりの發達を遂げ、吾人の感覺器官の心理學として、其の實驗的方法及び精密研究と相伴なふて進歩したが、記述的或は現實心理學 (eine deskriptive oder Realpsychologie) に對するデイルタイの要求は、今日も尙ほ二十年前と同じく一の要求に過ぎない状態にある。デイルタイの論ずる處によれば、「心理學は精神生活の諸齋一 (Gleichformigkeiten) に關する今日までの研究以上に、其の典型的差別、例へば藝術

家の想像力や、活動家或は實際家の資性なその如きものを、記述及び分析に附し、精神生活の形式の研究を、其の進行并に内容の現實態を記述することによりて補はねばならぬ。之によりて社會的歴史的實在の今日までの諸體系に於て、一方にありては心理學と、他方にありては美學、倫理學、政治團體の諸學并に歴史學との間に存在する間隙が充たされるのである。存在の生きた方の研究を深く内部的に欲求する總ての人々に對して、右の要求ほど痛切に感ぜられるものはあるまい。併し夫れと同時に強調されねばならぬ一事がある。夫れはかゝる現實心理學は、社會問題を穿鑿することなしには可能でないと云ふことである。吾人は常に人間の意識の運動路及び運動形式を自然科学的に把握せんとするだけでなく、又人間の精神生活の内容をも把握せんとするや否や、吾人は社會的環境から離れて考察することは出来ない。吾人は歴史的社會的環境に結び付けて、個人を考察せねばならぬ。要するに現實心理學の問題と社會學の問題とは、分離が殆んど不可能であるほど、相互に交叉して居るのである。人間の精神の研究は現實心理學に於ける如く、社會學に於ても終極問題である。而して吾人若し生理學的人類學と相並んで更に一の歴史的人類學を成立せしめんとするならば、其の歴史的人類學は又歴史的心理学及び社會學と最も密接に結合するであらう。個人の思惟、感情及び意志がより多く重要視される社會學的研究の其等の諸部分は、吾人は之を人類學及び心理學に屬するものと見做すことが出来る、而して之れに對

して團體生活の諸問題は、恐らくは狹義の社會學を構成するであらう。併し名稱は別に重要でない。人若し獨立なる社會學を成立せしめるを欲せずして、只一の現實心理學を立てるだけで満足せんとするならば、夫れでもよいので、夫れが爲めに恐らくは何物も失なはれないであらう。其の時には只同じ研究が異なる名稱の下で行はれるだけである。根本的に重要なものは、人間の結合及び依存の諸問題が、精神科學の方法及び原理に従ふて取扱はれ、自然科學に放任されないと云ふことである。併し人若し其等の任務を從來獨立に發達せる諸學科に移すならば、まさしく最後の問題、即ち人間の心意生活を分析的にはなく、其の現實性に於て把握せんとする問題は、其等の個別諸科學の夫れ夫れの特殊任務の爲めに、正當に取扱はれない危険の多いことを忘れてはならぬ。而して吾人若し只學問研究上の便宜或は教育上の便宜のみを問題とするならば、一定の組織的計畫に従ふて、諸範疇を區別し、彼等の限界を確定することが出来るであらう。併し吾人若し人類の生活及び健全を進歩すると云ふ、一切の知識の目標に注目して考へるならば、最大重要な問題は、現代は如何なる欲求を有するか、又吾人は其の欲求を充足する爲めに、如何にして最もよく役立つかと云ふことであると思ふ。

尙ほ吾人の大に注意すべきは、一の獨立なる社會及び精神の學 (eine Gesellschafts- und Seelenlehre) を願望する念は、世界觀の奥底に根柢を有することである。夫れ近世に於ける自然科學の

大なる發達は、宗教の舊形而上學が人間に接近し、直接に人間を助け救ふものと教へた神をして、個人心から大に遠ざからしめた。併し夫れが爲めに自然科學は宗教を滅亡させたとは云はれない。自然科學の進歩は探究す可からざる絶對者を益々讚美するに至らしめる。吾人は實に自然科學によりて、一切の現象の背後に儼存する其の力の眞の偉大及び萬能を感識するので、此處に神なるものは舊宗教の到底教ゆることの出来ない崇高な姿に於て、吾人の前に現はれるのである。かくて只科學の發達、知識の進歩によりてのみ、宗教の高上及び深化が望み得られるのである。一切の自然科學の最後の結果は、知的愛に於て原力原力を崇拜することが心情の要求を充足する以上、確かに一定の意味に於ては宗教的なものである。併し此の知的愛に於ける原力の崇拜は、人間の行動に對する深大なる内面性及び價値に於て、到底舊宗教の教へる神人の親子關係に及ばない。決して人間の心の奥底から芟除され得ない一の強い感情的欲求は、知的愛に於ける原力の崇拜によりて充足されることが出来ない。人間から人間への新しき道が見出されるに非らずば、如何に原力崇拜が強調されても無効である。世界の無限性が神と人間とを分離させることが大なるほど、人間は人間と益々親密に結合せねばならぬ。かくて今や吾人は文化人類の強く要求する處の、一の非形而上學的倫理學に對して合理的基礎を建設せねばならぬ。此處に社會學が必要となる。而して社會學のなす可き仕事は、人間と人間との結合を出来るだけ深く究明し、人間

は相互に如何なる依存關係に立つか、如何に一人の運命が他人の運命となつたか、如何に何人も自分の内部的及び外部的困難に對して、夫れが他人に知られるに非らずは、全く援助を見出さな
いかを示す事である。約言すれば吾人は一の經驗的倫理學の歴史的社會的基礎を設定せねばなら
ないので、而して人間は人間に對して何であつたか、又人間は人間に對して何であり得るかを、
經驗及び精神分析によりて論證することが、つまり經驗的倫理學の基礎を設定し得るのである。
かくて社會學の建設に關しては、分類に對する理論的欲求よりは、經驗的道德に對する實際的欲
求が一層重要である。文化人類は、個人と社會との紐帶を究明せんとする其の科學からして、彼
等の今日の欲求に應ずる倫理學の基礎を期待するのである。而してまさしく右の實際的傾向が、
單に組織的な理由から求め得られるよりは一層獨立なる地位を、社會學に認めざるを得ざらしめ
るのである。併し更に社會學を一層明白に自然科學から切り離し、而して精神科學内に於ける一
の特有の地位を、之れに與へることが必要である。而して此の必要を論證することが、余輩の任
務である可きである。

夫れ自然科學の發達、殊に生物學の發達によりて、吾人は人間は自然の一片にして、自然の法
則及び其の發達に従ふものなること、隨ふて又總て人類史は廣大なる自然史の一節にして、之れ
と不可離的に結合されて居ることを學んだ。併し人類史は其の特質的なる總てのものによりて、

即ち文化の發達、學問、藝術、政治、宗教等の發達によりて、世界發達の云は、一の裂目（新しき特有な特異な或物を保有する）を作つて居る。而して此の世界進化の裂目に於て獨特、無比なもの、特質は、つまり有機體の進化過程中に生起せる一實在物、人間にありては目的に向けられたる意志の現象が生起する様に、其の諸器官が形成され、完成され得ると云ふ點にあるのである。此の意志現象は高等なる動物に於て不完全に現はれて居るが、人間に於て始めて眞の完成に達するのである。而して此の意志の惹起する一切の變化は、只自然科学的概念及び考察の仕方のみでは、到底満足に究明され得ない處の一の特異な考察法の對象である。意志と他の心理過程との因果的依存關係は、直ちに承認さる可きである。併し夫れで意志の認識が盡くされるのではない。まさしく此處に自然科学的考察と精神科學的考察との反對が、確立さる可きである。

余輩は人間は目的に向けられたる意志を有すると云ふ事情に於て、人間と餘他の自然との間の根本的差別を認めるのであるが、今目的を實現せんとする此の努力に於て人間は行動し、而して歴史を形成する此等の行動を追究するのが、即ち精神科學の第一の又基本的な任務であるのである。此の場合に吾人は、只行動する人間の意志實現の敘述に必要な限りに於て、純物理的なる現象に注意するだけである。而して此の行動への意志が、個々の場合に於て如何にして生起するか、夫れは何を成就するか、夫れは如何なる團結に導くか等の問題は、社會學に於て重要な問

題であるのである。社會學は動機の世界に進入せんと努めねばならぬ。而して歴史學は行動の外部的進行及び其の外部的結果を叙述することに専ら努力するが、社會學は其等の歴史的事象を、常に精神的基本力に結び附けることに力を注ぐ可きである。

意志は心意の心理學的生理學的分析にありては、大に他に依存するものとして現はれるとするも、歴史的事象にありては、夫れは體驗として、人格の流出或は溢出として、人格的自覺の統一の發現として、相對的に自由なるもの、實に何れの物理的要素よりも、遙かに自由なるものとして、發動するのである。心理的現象、隨ふて又社會的現象にありては自由の度合は、物理的現象に於けるよりは、遙かに大なるものにして、此處に量的差異が質的差異に均しきものとなる。

かくて社會學は、先づ第一に其の心理學の中核が人間意志である以上、自然科學に屬しない。

自然科學的考察は人間を類オウツングとして其の普遍的に拘束されたる状態に於て把握せねばならないが、然るに人間は相對的に自由に行動し、意志するものとして把握されると云ふことは、社會學の前提である。歴史的社會的生活に於て、隨ふて其の學的研究に於ては、意志は一の統一的體驗であるが、自然科學的考察に於ては、意志は諸勢力の一の結合せる、而して分析を要する複合現象である。自然科學にありては、意志は事象の獨立なる始源として考察されないが、精神科學にありては、意志は事象の主要原因として承認されねばならぬ。而して社會學も亦、意志に對して

同一の態度をとるのである。

併し自然研究者と社會學者との途の分れるのは、單に意志の評價に關してだけでなく、更に人間及び其の行動一般の把握に關してである。併し此處に存在する差別を叙述する困難は、主として左の點にある。即ち精神科學の代表者は、生物學者が歴史的發達を無視してはならないと同じく、全く自然科學的なる考察から離れてはならぬと云ふことである。尙ほ他の學問を顧慮す可、必要は、恐らくは精神科學者に對しては自然科學者に對するよりは一層大なるものと思はれる。

而して諸般の精神科學中で、社會學は恐らくは多くの點に於て、自然科學に最も接近して居るものであると思はれる。是れ外面上から見れば、社會學は自然科學的系列と精神科學的系列との交叉點を、なすものであるからである。但し前者は數學——物理學及び化學——生物學——社會學と連續し、後者は歴史的人類學——歴史的心理学——社會學と連續するものである。併し吾人は社會學の問題に深入するほど、自然科學的見地が重要となる社會學的問題は、數に於て益々減少するのである。

社會學は又自然科學と異なりて人間に於て、總ての人々の眼前に夫れ自身で存立しない何物をも發見し得ない。社會學が學的に研究す可き心理的及び歴史的現象或は過程は、其の參與者に體驗として意識されたものである。而して其等の現象に於て、吾人は個別現象としては最早分析し

てはならないが、併し同様に分析してはならぬ他の無數の現象と、最も複雑なる相互作用をなし、かくて歴史的現象の全體は最早個別現象を判然たらしめない程、諸結合の濃密なる紛糾を作る諸現象が、常に社會學に於て取扱はれるのである。此等の行動及び意志昂奮の諸結合或は紛糾を、個々の行動及び意志作用に解き戻すのが、社會學の任務である。併し歴史的過程を、化學的實驗が物質を其の元素に分析する如く、完全に其の行動成分に分解することは、決して可能でない、或は只甚だ稀れに可能である。一般的には吾人は只事象に於て、出來るだけ多くの、殊に重要な意志作用を認識するに至るだけである。されば精神科學に於ける學的研究の結果は、決して完全に精密でなく、又或度に於て自然科學に於て見るが如くに、決して絶對的に正當でない。學的判斷の正當性の標準は、社會的歴史的科學にありては、相對的なものである。社會的現象或は過程の無數の要素は、決して一の場合に於て他の場合に於けると全く同様に結合されるものではないから、規則或は包括的公式は只甚だ稀に、又只大なる制限を以てのみ、可能であるのである。只統計的に把握される現象のみが、分量的に測定され得るのであるが、然るに吾人若し、吾人が社會學に望まねばならぬ如く、動機の世界に入り込まんとするならば、叙述に於ける數的精密は到底望まれないのである。

かくて社會學は又左の點に於て自然科學から區別される。即ち社會學は自然科學の對象の如く

に、残りなく分量的に規定されない關係を、主として取扱ふ可きものであると云ふことである。社會學的知識とは歴史的覺識であるか、又は自己分析によりて得られたる主觀的覺識であるかであつて、只比較的に重要ならざる場合に於てのみ、其の認識源泉が實驗によりて開かる可きである。

却説「社會學の基礎確立に就て」に於て、フォン・ウイゼ氏が最初に公にせる社會學論の大意は、以上述べしが如きものであるが、同氏の今日の社會學論に比して此處に先づ第一に注意す可きは、社會學を特に社會形式を研究する特殊學と見る、ジムメルの見解が採用されて居ないこと、否な寧ろ夫れは排斥されて居ることである。次に注意す可きは、同氏は大體上デイルタイの自然科學と精神科學との區別を基礎とし、而して從來一般に行なはれて居た社會學の自然科學的確立の企圖を根本的に排斥し、之を精神科學として確立せんとすることである。かくて同氏の最初の社會學論は、形式的社會學概念を主張するものでなく、之に反して實質的或は内容的社會學概念を主張するものである。而してデイルタイの精神科學の概念に基き、實質的科學として社會學を建設せんとするは、現代社會學の發達上、一の新しき企圖として、確かに注意される價值あるものである。併し夫れと同時に吾人の注意す可きは、デイルタイの精神科學の概念に基いて社會學を建設せんとするに於ては、到底確實に社會學の概念を決定することは出來まいと思はれる事

ある。是れフォン・ウイゼ氏が「社會學の基礎確立に就て」に於ては、あまり嚴格に社會學の概念を決定せんとして居ない所以であらうかと思ふ。同書に於ては同氏は社會學と云ふ名稱の如きは、どうしてもよい、又特に新しき獨立な學を建設す可きや否やと云ふ問題もどうしてもよい、只肝要なるは、歴史的社會的生活或は實在に就て、新しき問題を見定め、之を究明することであると論じて居る。而して同氏はデイルタイの記述心理學(或は同氏が特に好んで用ひて居る現實心理學)は社會の研究を以て補はれねば、到底完成され得ないものであると考へ、此處に新しき問題の存するを認めて、之を究明せんとするのである。恐らくはさきに述べし同氏の左の言葉は、同氏の社會學概念の眞髓を最もよく表明するものと思はれる。「根本的なること或は主要なることは、人間の結合及び依存の問題が、精神科學の方法及び原理に従ふて取扱はれ、自然科學に放任されないこと云ふことである。」但しフォン・ウイゼ氏が、「社會學の基礎確立に就て」に於て企だてる如く、デイルタイの精神科學の概念に基き、社會學の概念を決定せんとするに於ては、之を稍を荒漠たる姿のままに止めて置かねばならない所以、到底之を嚴格に決定する能はざる所以を明らかにするには、デイルタイの精神科學の概念其物を詳しく批判的に吟味せねばならないのであるが、此處には其の暇はないから他の場合に譲ることとする。

尚ほフォン・ウイゼ氏の最初の社會學論に於て、心理學的方法が根本的なものとされて居るこ

とは、余輩の見地から見て大に注意す可き點であるが、併し其の心理學なるものは、デイルタイの記述心理學を意味するものである以上、余輩の見地とは異なつて居る。而して余は記述心理學の如きものを社會學の基礎となす以上は、社會學は結局哲學的一學科となつて仕舞ひ、一の經驗科學として建設され得ないものと考へて居る。フォン・ウイゼ氏の社會學は、さきに述べし處によりて知られる如く、實際上一の哲學的學科となつて居るのである。されば同氏は社會學を稍々茫漠たる一の哲學的學科として建設せんとする以上は、右に述べしが如き社會學概念に止まることが出来たであらうが、併し同氏の社會學の研究が段々に進み、而して社會學を稍々茫漠たる哲學的一學科と考へるだけで満足出来なくなり、之を稍々明確に規定されたる一の經驗科學として發達せんとするに於ては、同氏は到底デイルタイの精神科學の概念に基いて立てた最初の社會學概念に止まることが出来なくなり、夫れ以上に進まねばならなくなつた。しかも社會學を純自然科學として建設せんとする方針を根本的に排斥する傾向を固持する以上、而して又自から新しき方針を立てんとはせず、何れかの先輩の方針に従はんとする以上、同氏はデイルタイの見地から自からジムメルの見地の如きものに移らねばならないであらう、或は前者から後者へ移るのが自然の傾向であらうと思はれる。かくて同氏はデイルタイに従ふ精神科學的社會學概念から、ジムメルの形式的社會學概念に移つたのであらう。而して形式を輕視するデイルタイの見地と、形式

を大に重要視するジムメルの見地との外見上の差異を考へると、フォン・ウイゼ氏の右の社會學概念の轉移は、一の急激な、根本的な轉移であるが如くに思はれるが、併しデイルタイもジムメルも現代の獨逸哲學界に於ては、共に生命哲學レビエンズフィロソフイを唱へる人々であり、(Richard Müller-Freienfelds, Die Philosophie des 20. Jahrhunderts in ihren Hauptströmungen. 1923. 參考) 且つ兩者の間には微妙なる共通の思想が流れて居るから、フォン・ウイゼ氏が最初の社會學概念から、ジムメルの社會學概念へ移つたことは、實質的には外見上考へられる程、急激な根本的な轉移ではないと思はれる。されば同氏は今日の如くに、ジムメル流の社會學概念を主張するに至つても、實質的には尙ほデイルタイ思想を固持して居る場合が多いと思はれるのである。更に余はジムメルの社會學概念に含まれる對象論の見地は、デイルタイの記述心理學の見地と共通する處があり、尙ほ兩者がフッサールの現象學の見地と共通する處があると考へ、而して夫れよりして又今日ジムメルの社會學概念を遵奉する社會學者の間に、現象學の見地を採用する人々のある所以を説明せんとするのである。要するに余は今日勃興しつゝある獨逸の社會學の根柢には、デイルタイ、ジムメル及びフッサールの哲學の見地が色々に交叉して流れて居るので、随ふて之を深く根本的に理解する爲めには、右の三氏の哲學の見地を、相互の關係に於てよく理解して置くことが肝要であると思ふ。併し此の問題は此處で論究するには、あまりに廣大であるから、余は改めて特に之を論

究したいと思ふ。

却説余は本節に於て以上論述せる處によりて、フォン・ウイゼ氏の最初の社會學概念は如何なるものでありしかを明らかにし、又同氏が夫れよりジムメル流の社會學の概念、即ち社會學を社會形式を研究する特殊學と見るものに移れる理由を、余の推察する處によりて究明したと思ふが、終りに前節に於て述べし同氏の論文「特殊學としての社會學」に於て、論述されて居る同氏の社會學概念が、最近に如何に發展されて居るかを、同氏が編輯者の一人となつて、千九百二十一年から發行され居る *Kölnner Vierteljahrshefte für Sozialwissenschaften* に於ける同氏の諸論文によりて、考究して見ようと思ふ。